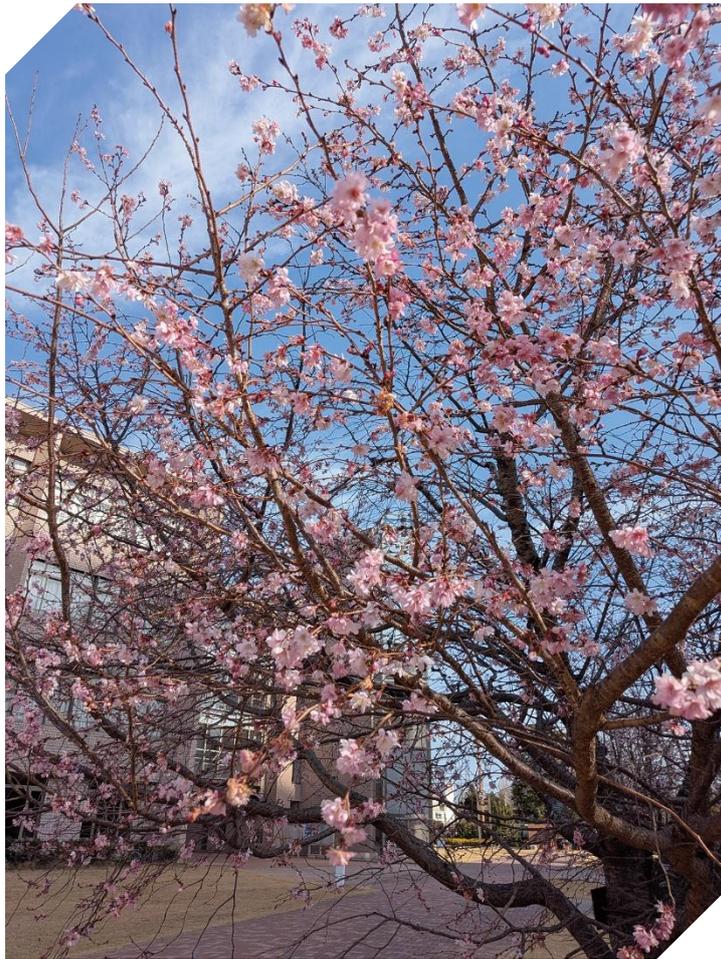


---

---

「和洋卒・元家庭科教員の先輩と学生との対話セミナー」報告



# 目次

目次	1
はじめに	2
「和洋卒家庭科教員のライフヒストリーと家庭科の教育実践に関する調査研究」について	
調査研究の目的	3
調査研究の概要	3
調査時期と調査対象者	4
「和洋卒・元家庭科教員の先輩と学生との対話セミナー」	
プログラム	5
講演者 及川亜希子氏のご紹介	6
『堀越千代 自営の心ー日本女子教育の先駆者ー』(岩手日報社)の概要	6
<b>【講演】 及川亜希子氏 岩手日報社総合メディア局プラス日報事務局長</b>	7
<b>『堀越千代 自営の心ー日本女子教育の先駆者ー』を執筆して</b>	
トークセッション講師の先生方のご紹介	11
<b>【トークセッション】「和洋卒・元家庭科教員の先輩と学生との対話セミナー」</b>	12
お話をうけて	20
閉会のことば 和洋女子大学家政学部長 熊谷優子先生	23
対話セミナーを受講した学生の感想	24
記録写真	28

## はじめに

和洋学園は、女子教育の先駆者として名高い堀越千代先生によって明治 30(1897)年に設立されました。本年は創立 129 年目を迎えます。家庭科教育研究所は、和洋学園が 125 周年を迎えた 2022 年 4 月に創設され、この 4 年間、家庭科教育に関わるすべての人たちが立場や分野を超えて集い協働するプラットフォームづくりを目指して活動を積み重ねてきました。

本研究所が行った活動の 1 つが、「和洋卒・家庭科教員のライフヒストリーと家庭科の教育実践に関する調査研究」です。本調査研究の対象者は、昭和 20 年代から 40 年代にかけて和洋学園に学び、高度経済成長や科学技術の発展、家庭生活の変容、学習指導要領の変化、男女共修の「家庭科」への移行を家庭科教員として経験し、創設者の教えである自立する道を模索し切り開いた女性たちです。

この度、本調査研究を終了するにあたり、和洋学園の創立 125 周年に向けて刊行された『堀越千代 自営の心ー日本女子教育の先駆者ー』の執筆者である岩手日報社の及川亜希子氏、本調査研究のインタビュー対象者である 4 名の元家庭科教員の卒業生を大学にお招きし、家庭科教員を目指している本学 2~4 年生の家庭科教職課程の学生との対話セミナーを開催いたしました。

本冊子には、2026 年 1 月 14 日(水)に本学で開催した「和洋卒・元家庭科教員の先輩と学生との対話セミナー」を集録するとともに「和洋卒・家庭科教員のライフヒストリーと家庭科の教育実践に関する調査研究」の概要を掲載いたしました。

和洋学園の卒業生が、昭和期・平成期の家庭科激動期に家庭科教員としてのキャリアをどのように形成し、どのような教育実践をしたのか、家庭科教員としてどのような困難に直面し、家庭科教育の発展に尽くしたかを記憶にとどめ、次世代に伝えたいと願います。

2026 年 2 月

和洋女子大学 家庭科教育研究所

佐藤 宏子 (家庭科教育研究所特別研究員)

工藤由貴子 (家庭科教育研究所特別研究員)

柴田 優子 (家庭科教育研究所研究員、  
家政学部家政福祉学科准教授)

# 「和洋卒家庭科教員のライフヒストリーと 家庭科の教育実践に関する調査研究」について

## 1. 調査研究の目的

1897(明治 30)年に設立された和洋学園は、2022 年に創立 125 周年を迎えた。女子教育の先駆者として名高い創設者の堀越千代(1859～1948)は、時代の先を見通し、女性の自立という高い理想を掲げ、洋裁の実学教育を通じて女性の経済的自立、社会進出を促した。この創設者の教育実践は卒業生たちによって様々なかたちで実を結び、多くの卒業生たちが社会人として、市井の人として多様なライフコースを歩んでいる。

本研究では、家庭科教員として長年にわたって家庭科教育に尽力された卒業生に光を当てる。これは、和洋学園卒業生の中で家庭科教員として活躍したライフコースが、「女性が自立する道を模索し切り開いた」典型的パターンであったからである。

本研究でインタビューした卒業生たちは、昭和 20 年代から 40 年代にかけて和洋学園に学び、高度経済成長や科学技術の発展、家庭生活の変容、学習指導要領の変化、男女共修の「家庭科」への移行を家庭科教員として経験し、創設者の教えである自立する道を模索し切り開いた女性たちである。本研究では、劇的に変化する生活や社会のなかで、和洋学園の卒業生が家庭科教員としてのキャリアをどのように形成し、どのような教育実践をしたのか、家庭科教員としてどのような困難に直面し、家庭科教育の発展に尽くしたか等を明らかにすることを目的としている。

## 2. 調査研究の概要

第二次大戦後の社会・経済的環境や学習指導要領が大きく変化する中で、和洋学園を卒業後、家庭科教員として長年にわたって勤務した経験を持つ卒業生に対して、半構造化インタビューを実施した。

インタビューの調査項目は、①和洋学園卒業後、対象者はどのようなライフコースをたどり、家庭科教員としてのキャリアを形成したのか、②和洋学園で受けた教育は、対象者のライフコース、ライフスタイル選択、家庭科の教育実践にどのような影響を及ぼしたのか、③昭和 30 年代の高度経済成長期から平成期に家庭科が男女共修になるまでの間、家庭科教員として家庭科教育の意義をどのように考え、どのような家庭科の教育実践を行ったか、どのような困難に直面したかなどである。

本研究は、「和洋卒家庭科教員のライフヒストリーと家庭科の教育実践に関する研究」の研究実施申請書を「和洋女子大学人を対象とする研究倫理委員会」に提出し、2022 年 6 月 10 日付けで承認を得た(受付番号:2211)。

## 3. 調査時期

2022 年 8 月～2023 年 8 月

#### 4. 調査対象者

---

●インタビュー調査の回答者(19名) 調査日時順

橋本百代氏(昭和43年被服学科卒、千葉県八千代市、2022.9.15 調査)  
菅澄子氏(昭和40年被服学科卒、千葉県千葉市、2022.9.22 調査)  
黒澤知子氏(昭和41年被服学科卒、東京都町田市、2022.9.26 調査)  
山口登美子氏(昭和35年生活学科卒、千葉県松戸市、2022.10.11 調査)  
豊島茅保子氏(昭和40年生活学科卒、秋田県大仙市、2022.11.3 調査)  
伊藤弘子氏(昭和39年被服学科卒、岩手県盛岡市、2022.11.4 調査)  
細谷恭子氏(昭和40年被服学科卒、茨城県筑西市、2022.11.21 調査)  
鈴木満里子氏(昭和41年被服学科卒、栃木県鹿沼市、2022.11.25 調査)  
大島良子氏(昭和25年和洋専門学校本科卒、栃木県那須塩原市、2022.11.25 調査)  
新城桂子氏(昭和41年被服学科卒、沖縄県那覇市、2023.1.26 調査)  
桃原和子氏(昭和35年被服学科卒、沖縄県那覇市、2023.1.27 調査)  
喜屋武和子氏(昭和41年生活学科卒、沖縄県那覇市、2023.1.27 調査)  
本成桂子氏(昭和34年短大生活学科卒、沖縄県宜野湾市、2023.1.28 調査)  
大貫憲子氏(昭和49年生活学科卒、栃木県那須塩原市、2023.2.9 調査)  
足立セツ子氏(昭和36年短大被服学科卒、栃木県大田原市、2023.2.9 調査)  
井上圭子氏(昭和29年短大生活学科卒、熊本県宇城市、2023.7.10 調査)  
得丸富美子氏(昭和40年被服学科卒、大分県由布市、2023.7.11 調査)  
大滝京子氏(昭和49年被服学科卒、山形県南陽市、2023.8.28 調査)  
高瀬豊子氏(昭和47年被服学科卒、栃木県矢板市、2023.8.29 調査)

●文書および電話による調査の回答者(4名) あいうえお順

石井初江氏(昭和43年被服学科卒、千葉県富津市)  
北見美智子氏(昭和39年被服学科卒、千葉県我孫子市)  
北村暁美氏(昭和40年被服学科卒、高知県南国市)  
神馬宣子氏(昭和40年被服学科卒、青森県津軽市)

●調査への協力者 あいうえお順

石井荘子氏(昭和43年生活学科卒、千葉県船橋市)  
菊池房江氏(昭和48年生活学科卒、岩手県花巻市)  
大楽香子氏(昭和52年食物学科卒、秋田県仙北市)  
高梨禮子氏(昭和42年被服学科卒、東京都世田谷区)

## 「和洋卒・元家庭科教員の先輩と学生との対話セミナー」

2026年1月14日(水)に和洋女子大学南館9階の大会議室において、家庭科教職課程の2～4年生を対象に「和洋卒・元家庭科教員の先輩と学生との対話セミナー」を開催した。

### プログラム

13:30～13:35 開会のことば 本日の趣旨

佐藤宏子(家庭科教育研究所特別研究員)

13:35～14:10 及川亜希子氏講演

『堀越千代 自営の心ー日本女子教育の先駆者ー』を執筆して

14:10～14:50 元家庭科教員4名の先生方とのトークセッション

< 講師の先生方 >

黒澤知子先生 元佐賀県の高等学校教員(1966年 被服学科卒)

鈴木満里子先生 元栃木県の特別支援学校・高等学校教員(1966年 被服学科卒)

高瀬豊子先生 元栃木県の高等学校教員(1972年 被服学科卒)

大貫憲子先生 元栃木県の中学校教員・小学校校長(1974年 生活学科卒)

14:50～15:05 お話を受けて

及川亜希子氏(岩手日報社)

久保桂子先生(元和洋女子大学特任教授)

中島明子先生(和洋女子大学名誉教授)

柳澤幸江先生(和洋女子大学家政学部教授)

柴田優子先生(和洋女子大学准教授、家庭科教育研究所研究員)

工藤由貴子(家庭科教育研究所特別研究員)

15:05～15:10 閉会のことば

熊谷優子先生(和洋女子大学家政学部長)

---

---

## 講演者 及川亜希子氏のご紹介

---

---

岩手県北上市ご出身、お茶の水女子大学卒業。

1998 年岩手日報社入社。編集局整理部、宮古支局、報道部などを経て 2018 年学芸部（現文化部）次長。2021 年広告事業局企画推進部長、2022 年編集局文化部長。2025 年から総合メディア局プラス日報事務局長。

2021 年1月から半年間、岩手日報朝刊で「自営の心 和洋女子大の祖 堀越千代」を連載し、2022 年 5 月、『堀越千代 自営の心ー日本女子教育の先駆者ー』を執筆、刊行した。

### 『堀越千代 自営の心ー日本女子教育の先駆者ー』（岩手日報社）の概要

本書は、和洋女子大学を創設した堀越千代先生についての記録である。近代女子教育の先駆者であった堀越千代（1959～1948）は、激動の幕末期に盛岡藩士の一男四女の末子として盛岡市で生まれ、9 歳で上京した。9 歳の女の子が、鉄道もない時代、盛岡から東京を目指した理由や長い道のりをどのようにして上京したかなどの記録は残っていない。1877（明治 10）年、千代は仙台藩士の家に生まれた修一郎と結婚した。結婚後は、男女洋服裁縫学校（東京神田）で英米式洋服裁縫を、越後屋呉服店（現三越）の洋服部でフランス式洋裁を、横浜の洋服店「ローマン商会」で男子服洋裁を学び、先端の洋裁技術を会得した。洋裁の他にも漢文学、和裁、習字、数学、国文学、小笠原礼法を学んだ。1897（明治 30）年、千代 37 歳の時に東京麹町の自宅で「和洋裁縫女学院」を創設し、1901（明治 34）年に「和洋洋裁女学校」と改称した。



先端の洋裁教育を主軸とし、教員養成に力を注いだ和洋の独自教育は、女子教育への関心の高まりと相まって評判を呼び、生徒数は年々増加したため、東京・九段の地で移転新築や拡張を重ね、1928（昭和 3）年に「和洋女子専門学校」となった。「和洋裁縫女学院」は生徒数 30 名足らずでスタートしたが、この頃には生徒数 1500 名の学校に発展した。しかし、1945（昭和 20）年、東京大空襲により九段校舎は 1 棟を残して焼失したため、市川市国府台に移転し、戦後の学制改革により 1949（昭和 24）年に「和洋女子大学」となった。千代は大学昇格を見ることなく 1948（昭和 23）年に享年 90 歳で生涯を終えた。

本書には、千代が 1923（大正 12）年に創設した「堀越高等女学校」（現：堀越高校）、同窓会誌「むら竹」に堀越千代が寄せた論説講話なども収められている。

講演

及川亜希子氏

聞き手：佐藤宏子

『堀越千代 自営の心—日本女子教育の先駆者—』を執筆して

佐藤：及川亜希子さんを紹介させていただきます。及川さんは、岩手県北上市のご出身で、お茶の水女子大学を1998年に卒業されました。ご卒業後はご郷里にもどって、岩手日報社で活躍されています。

2021年1月から6月までの半年間、岩手日報朝刊で「自営の心 和洋女子大の祖 堀越千代」を22回にわたって連載され、2022年には『堀越千代 自営の心—日本女子教育の先駆者—』を執筆、刊行されました。現在は総合メディア局プラス日報事務局長の重責を担っておられます。



佐藤：及川さん、今日は盛岡からありがとうございます。今朝の盛岡は吹雪だったそうですね。『自営の心』を執筆された経緯を含めて、自己紹介をお願いします。



及川：皆さん、こんにちは。朝、岩手から参りました。岩手日報社の及川と申します。このような場は慣れておりませんので、非常に緊張しております。お聞き苦しいところもあるかと思いますが、皆さんと楽しくお話できればと思っていますので、よろしくをお願いします。皆さんのなかに岩手出身の方っていらっしゃいますか？残念、いらっしゃらないですね。千代さんのふるさは岩手県盛岡市です。

及川：和洋学園さんが2022年の9月に創立125周年ということで、理事長さんが井戸を掘った人を大切にしたいというお考えを持って、堀越千代さんを顕彰するのに千代さんの書籍が欲しいということで、千代さんの古里、地元の新聞社である岩手日報社にお声がけ頂きました。私はそのころ岩手日報の編集局の記者をやっていて、編集局長から話をもらい、『自営の心』を執筆することになりました。

千代さんの出身は岩手県盛岡市ですけれども、地元でも千代さんを知っている方っていうのはなかなかいなかったんです。そこで、2021年、創立記念の一年前から岩手日報朝刊で半年間、22回にわたって千代さんの連載をしました。その連載をまとめたのが、この『自営の心』という本です。そのほかにも、和洋学園さんは創立記念事業として2016年に盛岡市のお寺に千代さんの顕彰碑を建てました。顕彰碑を建てたお寺は、浅田次郎さんの小説『壬生義士伝』に出てくるお寺で正覚寺といえます。顕彰碑の除幕式も行われましたが、その様子を岩手日報の記事で紹介させていただきました。不思議なことがあったんですが、除幕式の時に、どこからともなくアゲハ蝶が飛んできたんです。蝶は魂を運ぶと言われてしますので、千代先生がふるさとに150年ぶりで戻っていらしたと、参列されていた皆さんから歓喜の声があがりました。



**佐藤:** 私はこの本を読ませていただいて2つのことを感じました。1つ目は及川さんの文章が素晴らしくて、魅力的な文章に引き込まれて、スーッと読めてしまうということでした。和洋は及川さんにこの本を書いていただいて本当によかったと思います。ぜひ皆さんにも読んでいただきたいと思います。2つ目は、千代先生に関する資料や書籍はもとより千代先生の足跡も、ほとんど残されていないということを知りました。そして、多くの岩手県民は、及川さんが2021年に半年間、岩手日報朝刊で「自営の心 和洋女子大の祖 堀越千代」を連載したことで、はじめて堀越千代を知ったということもわかりました。及川さんは、千代先生を取材・執筆されて、堀越千代の生き方や人となりにどのような感想を持たれましたか。

**及川:** 取材の過程で、千代先生はとにかく勤勉で勉強が大好きで、それからすごく辛抱強い方だなと思いました。雪国で育っているのも、寒くて厳しい環境でも耐えて耐えて生きていくという岩手県人らしい人柄だと思いました。それから、千代先生には反骨精神ともいえる気質があります。千代先生の気質が育った背景には、明治初期の戊辰戦争の時に盛岡藩は旧幕府軍について負けたため、新政府から賊軍の汚名を着せられました。盛岡藩はその無念、屈辱は学問で晴らそうということで、青少年の育成に大変力を入れました。盛岡藩ではその時期に数々の偉人が出ています。例えば、総理大臣になった原敬さん。それから、武士道を書いた新渡戸稲造さん。北海道大学を立ち上げた初代総長の佐藤昌介さんなどです。盛岡藩には江戸に出て学問で敵を打つという雰囲気があって、若い時から東京に出て、すごく勉強して多くの人材を輩出しました。千代先生もそうした流れの中で東京に出て、勉学に励んだのだと思います。

**佐藤:** 岩手といったら岩手山。岩手の象徴ですね。及川さんのご著書を読んで、岩手山が千代先生の心の支えなのかなと感じたのですが、そのあたりはいかがですか。

**及川:** はい、私もそう思います。岩手山は、富士山のように形がきれいな山で、2000mほどの山ですけれども、千代先生の心のふるさとになっていたと思います。皆さんは歌人の石川啄木を知っていますか。石川啄木も東京に出てきて思い出すのが岩手山の風景だったんです。千代先生の顕彰碑は、岩手山の形をしていますし、顕彰碑から岩手山を眺望できる本当にいい場所にあります。ぜひ岩手にいらした時には皆さん行ってみてください。

**及川:** 千代先生の学校づくりのキーワードは洋裁教育、それから教員養成だと思います。千代先生が生きていた頃は、和装がメインだったけれど、千代先生は早くから洋装に着眼して、学校教育に初めて洋裁教育を取り入れました。また教員養成も時流を捉えたものでした。千代先生は先を見通す力とか、時流を捉える才覚があり、既存のものではなくて、新しいものにどんどん挑戦する力をお持ちだったと思います。「女性の自立」を体現する千代先生の姿は、現代社会を生きる女性たちにもヒントになると思います。

**佐藤:** 千代先生は、幕末の安政6年に生まれていますから、安政の大獄が吹き荒れて、いろんな人が殺されたりしている。そのような時期に生まれて、明治維新があって、そして9歳で江戸に出てこられました。千代先生が生きた明治、大正、昭和の戦前期という時代の女子教育を、及川さんはどのようにとらえていらっしゃるんですか。

**及川:** はい。まず、千代先生は明治 30 年(1897)に和洋女子大学の前身である和洋裁縫女学院を創設しているのですが、この頃は、ようやく女子教育が芽生えた「女子教育の萌芽期」だったと思います。当時の教育というのは、良妻賢母の育成で、女性は家でしっかり夫に仕え、お子さんを育てましょうというような教育でした。千代先生は明治 30 年代というとても早い時期に和洋裁縫女学院を創設しています。千代先生には先見の明があったのでしょうか。現在、五千円札になっている津田梅子さんの津田塾大学の前身である女子英学塾よりも早く学校をつくっています。そして、大正期になると千代先生は堀越高等女学校を創設しています。大正期は高等女学校が普及した時期で、「個性の尊重」や「社会参加」を重視する動きや民主主義的な思想が広がり、女性のライフスタイルにも変化が見られました。高等女学校や女子専門学校が増えて、職業に就く女性も増えました。女性も学んで職業に就ける、教養を身につけて仕事ができるというような変化が見られるようになりました。昭和に入ると戦争が影響を及ぼしてきますので、女子教育は一時期ちょっと停滞というか、後退した時期もありました。でも、戦後の教育制度の大改革で教育基本法ができて、個人の尊重と男女平等を基調とする教育へと転換しました。男女機会均等の教育を受けられるようになり、男女共学の導入もあって、現代の女子教育、女性の社会進出の土台ができたと思います。

**佐藤:** 明治、大正、昭和と、大きく社会が動き、教育制度が変革する中で、千代先生は先を見通してこのような女子教育の場を創ってこられたんですね。今、私たちが歴史を振り返ったとき、千代先生のこのような先を見通す力とか、時流を捉える才覚、そして勤勉さには驚かされますね。

**及川:** はい、千代先生がとても勤勉だったということは、まだ詳しくお話してなかったですね。千代先生は 18 歳で仙台藩の修一郎さんと結婚しますが、その後 21 歳からひたすら勉強の日々に入ります。まず、修一郎さんから漢文学を学んでいます。さらに、千代さんの代名詞になる裁縫は、和裁からフランス式洋服裁縫、それから英米式洋服裁縫、あと男子服裁縫とかいろんな様式を学んでいます。そして、国文学、数学、習字、礼法も学びました。千代先生は 84 歳まで堀越高校の校長先生をしていらっしたんですけれども、84 歳になってから新しく謡曲を始めたり、とにかく学びの日々です。学びに希望を持った先生だったと思います。

**佐藤:** 千代先生は時代の最先端を次々に学んで、いろいろなものを貪欲に吸収して、自分の身につけていった方だなと感じます。ひとつひとつを学ぶことが、今のように簡単じゃなくて、とても大変だったと思います。フランス式洋服裁縫を学ぶのだったらこしかない。英米式洋服裁縫だったらこしかない。男子服裁縫を学ぶならこしかないというように。千代先生は学んだことを次々積み重ねて、自らが学んだものすべてを和洋の教育に生かしたのだなあと感じさせられます。

**及川:** はい、そうですね。時代になかったもの、時宜になかったものを取り入れていったということですね。千代先生が裁縫の学校を創ったのは、福沢諭吉が女子教育には裁縫が一番重要だということを書いた 5 年後です。多分、夫の修一郎さんは青少年の雑誌を作っていた編集者だったので、時代を捉えることに非常に長けた人だったので教えがあったのではないかと思います。

**佐藤:** 及川さんをご郷里の岩手日報社に入社され、岩手県における「女性活躍」のフロントランナーとして走ってこられたと思います。「あとがき」のなかに「堀越千代が時代の先をしなやかに進むイメージとは裏腹に、男性優位の当時のなかで、千代がどれだけ人知れず悩み、もがいたのだろう。日々の自分と重なり、千代の存在がぐっと近くなった」と書かれています。この点については、いかがでしょうか。

**及川:**千代先生は時代の先を行った方なので、どれだけ強いのか、「雲の上の存在」の人だとずっと思っていました。でも、同窓会誌「むら竹」に千代先生が寄せた論説講話が残っていて、そこに千代先生の本心が垣間見られます。私は論説講話を読んで、千代先生も、やっぱりものすごく悩みながら進んでいたというのが分かりましたし、あー、千代先生は今の自分と似ているとか、普通の女性だなと感じるところがいっぱいありました。ぜひ、千代先生の論説講話に触れてみてください。人間味のある千代さんの姿も感じられると思います。

**佐藤:**論説講話は、『自営の心』のなかにも収録されています。論説講話では千代先生の凛としたお姿とは少し趣の異なる悩める女性の姿も感じられます。学生さんたちもぜひ読んでみてください。ご講演の最後に、先輩女性として及川さんから若い学生たちへのメッセージをお願いいたします。

**及川:**皆さんたちは、和洋女子大学に通われている学生さんですので、「社会で活躍できる自立した女性を育てる」という千代先生の建学の精神を忘れないでほしいと思います。千代先生は『自営』という言葉を使っています。当時は『自営』、今だと『自立』ということだと思います。ですので、その自立のために社会で活躍できる女性になってほしい、そして千代先生の願いを叶えてほしいなと思います。それから、最近よく女性活躍と言われますが、皆さんたちちょっと気が重いところもあるのではないかと思います。私は数値目標という数字に踊らされているような感じを受けるときがありますが、あまりそういうことは気にしないで、自分のキャリアやライフプランを自由を選択して、自分が日々楽しいなって思える働き方や生活をしていただけたら、嬉しいなと思います。千代先生のように悩む時もあると思うけれど、行動することで前に進めると思います。

それから、自立を実現するためになんですけれども、人とのつながり、社会とのつながりを大切にしてほしいと思います。千代先生も旦那さんの修一郎さんにずいぶん助けられたと思います。自分の理解者がいるということはすごく大きいことで、力になります。ですので、皆さん、パートナーでもいいですし、家族でも友人でも、よき理解者をつくってほしいと思います。今は学生ですから、たくさん友人を作って、つまずいたときとかに一緒に話し合えるような人を大事にしてほしいと思います。

先ほど新渡戸稲造の話をしました。新渡戸稲造さんもいろんな大学の立ち上げに関わっていて、東京女子大学の初代学長にもなりました。その新渡戸先生が残した言葉を最後にご紹介したいと思います。「男子は経糸(たていと)で女子は緯糸(よこいと)である。経糸が弱くても緯糸が弱くても、織物は完全とは云(い)はれませぬ」。皆さんにはこの言葉を覚えてほしい、この言葉を忘れないで社会に羽ばたいてほしいと思います。



**佐藤:**及川さん、どうもありがとうございました。短い時間でしたけれども、堀越千代先生のことについて書いてくださった及川さんから、このように直接お話をうかがえたという貴重な機会が学生時代にあったということを、学生さんたちは忘れないでほしいと思います。

**及川:**ありがとうございました。

## 講師の先生方のご紹介

鈴木満里子先生 1966(昭和41)年 和洋女子大学被服学科のご卒業

栃木県宇都宮市のお生まれ。和洋女子大学卒業後、最初の赴任先が栃木県立の特別支援学校だったため、東京学芸大学に半年間の内地留学をして特別支援教員の資格を取得し、5年間特別支援学校に勤務した。その後は栃木県立の普通高校の家政科に24年間、県立工業高校に9年間勤務した。平成元年に家庭科が男女共修になったときは、全校生徒のほとんどが男子生徒で女子教員がいない栃木県立今市工業高校に配属された。1クラス40人の工業高校の男子生徒に家庭科を教えたことは忘れがたい経験となった。全国高等学校家庭科技術検定の指導や審査委員、栃木県高等学校文化連盟手芸部会の副会長としても活躍した。

黒澤知子先生 1966(昭和41)年 和洋女子大学被服学科卒のご卒業

佐賀県小城市のお生まれ。和洋女子大学卒業後、郷里の佐賀県にもどり県立農業高校の生活科で7年、県立牛津高校の被服科で15年、県立佐賀商業高等学校で「家庭一般」を8年、そして母校の県立小城高校に定年までの6年、勤務した。牛津高校ではファッションショー、佐賀県の伝統工芸である「佐賀錦」を授業やクラブ活動に取り入れたこと、野球強豪校の佐賀商業高校では、甲子園で応援する卑弥呼の応援コスチュームを家庭科の被服製作の授業中に男子と女子と一緒に製作し、全校生徒で応援して甲子園優勝したことが思い出に残っている。全国高等学校家庭クラブ連盟50周年記念大会で表彰された。

高瀬豊子先生 1972(昭和47)年 和洋女子大学被服学科のご卒業

栃木県大田原市のお生まれ。和洋女子大学卒業後、栃木県立鹿沼農業高等学校(家政科)、県立那須高等学校(普通科)、県立大田原女子高校(家政科と普通科)、県立氏家高等学校(家政科と総合学科)、県立白楊高等学校(服飾デザイン科)に勤務した。全国高等学校家庭科技術検定(洋裁、和裁、食物)の指導や全国専門委員として活躍し、白楊高等学校、大田原女子高校、氏家高等学校では学びの集大成としてファッションショーに取り組んだ。家庭クラブ活動では施設訪問や奉仕活動を重視した福祉教育を行い毎日新聞や下野新聞に掲載され大きな話題となった。モンゴルの学校との交流・訪問にも力を入れた。

大貫憲子先生 1974(昭和49)年 和洋女子大学生生活学科のご卒業

栃木県那須塩原市のお生まれ。高校時代に家庭クラブ活動を経験した。和洋では家庭科と保健の教員免許状、栄養士免許、学校図書館司書、卒業後に書道の教員免許を取得した。栃木県の中学校教員として家庭科、保健、書道を26年教えた後、小学校で教務主任・教頭・校長として12年勤務した。中学校教員時代は、1992年の関東甲信越技術・家庭科大会で「住居」の生活環境でゴミ問題を取り上げた授業を行い、当時の最先端の内容として大きな反響と高い評価を得た。小学校の校長講話では、和洋の生物学や栄養士養成課程の授業等で感銘を受けた内容や手法を深め発展させて、子どもたちに魅力的なお話をした。

## トークセッション

佐藤: それでは、先輩 4 人の方々とトークセッションに移ります。

4 人の先輩のご紹介は、プログラムに記載させていただきましたので、ここではお並びいただきました順番に、ごく簡単にご紹介させていただきます。皆様から向かって一番左側にお座りいただきましたのが、黒澤知子先生です。黒澤先生は佐賀県の小城市のお生まれで、被服学科を卒業されました。卒業後、ご郷里の佐賀に戻って佐賀県の県立高校で家庭科の教員を長年勤められました。現在は東京都町田市にお住まいです。そのお隣が鈴木満里子先生です。鈴木先生は栃木県宇都宮市のお生まれで、被服学科を卒業されました。最初の赴任校だった栃木県立の特別支援学校に 5 年間、その後は栃木県の県立高校にお勤めになりました。そのお隣が高瀬豊子先生です。高瀬先生は栃木県大田原市のお生まれで、被服学科を卒業されました。卒業後は栃木県立の高等学校で家庭科教員として長年お勤めになりました。そして、皆様から向かって右側のお席にお座りいただきましたのが大貫憲子先生です。大貫先生は栃木県的那須塩原市のお生まれです。大貫先生は生活学科のご卒業で、和洋では家庭科の教員免許状のほかに、栄養士免許、学校図書館司書、卒業後に和洋で書道の教員免許を取得されています。大貫先生は、栃木県の中学校教員として 26 年間お勤めになられた後、小学校で教務主任、教頭、校長として 12 年間お勤めになりました。



佐藤: 今日は時間が限られていますので、事前に柴田先生から学生さんたちに 4 人の卒業生の先生方に質問したい内容を出していただきました。それを集計して、多かった質問を中心に先生達からお答えいただこうと思います。学生さんの質問で一番多かったのは、家庭科の教員をしていて大変だったことは何ですか。それをどうやって乗り越えたのですか、という質問です。黒澤先生から順番にいかがでしょうか。

### <家庭科教員をしていて大変だったこと>

黒澤: 座って失礼いたします。私は黒澤知子と言います。佐賀出身で、佐賀の県立高校に 36 年間勤めました。退職してすぐに東京都町田市で長男の家族と一緒に住んでおります。家庭科教員をしていて非常に大変だったことは、子育てだったと痛切に感じております。私が大学を卒業したのは昭和 41 年 3 月でした。50 年代の初めまでは、私が勤めていた山間地帯には保育所とか保育施設がありませんでしたし、公的に保育してくれる人もいませんでした。そこで出産して 1 年後から勤務するために、自分で年配のおじいさんとおばあさんの家族を探しました。そしてそこに子どもを預かってもらって、毎日お弁当を作って持って行って、子どもに食べさせてもらいました。私の両親も叔父叔母もすべて教員をしていましたので、親たちは子育てのたいへんさをよく知っていました。日曜日になると子どもたちを見に来てくれました。





**鈴木:**鈴木です。よろしくお願いします。和洋には藤田トラ先生という和服を着た和裁の先生がいらっしゃって、私たちはとても厳しいご指導を受けました。少しでもちがうと先生は「お直し」と仰って、何度も直された経験があります。でも、その厳しいご指導が教職時代に生きました。家庭科を教えていて苦勞したり困ったりしたことはなかったと思います。私は、普通高校の家政科の生徒に実習するのはすごく楽しくて、楽しい思い出しか残っていません。

50 歳になった時、家庭科が男女共修になって、男子もはじめて家庭科の授業を受けることになりました。その時、若い先生では工業高校の男の子に家庭科を教えるのはちょっと無理かもしれないと

いう理由で、50 歳前後の先生が工業高校に転勤になりました。私も工業高校に転勤になったひとりでした。工業高校の男子生徒に調理実習や被服実習を教えることに、はじめは苦勞しました。特に 1 クラス 40 名の男子生徒に助手もなしで、調理実習の授業をすることには危険もありました。ガスや包丁、食中毒の危険性があります。実習後の包丁の数の確認、布巾の消毒などに全神経を使いました。1 年目は本当に辛かったです。でも、実習の後に「先生、うまかったよ。来週は何つくるの」と満足そうに言われて、充実感を感じられるようになりました。それから、工業高校の男子生徒は、ミシンの調子が悪いと「油さしてやるよ」「調子悪いからちょっと分解して調べてやるよ」、調理実習で包丁の切れが悪いと「研いでやるよ」なんて言って、ミシンは本当に分解しちゃいます。自分たちは機械に強いと思っています。でも、後片付けが大変なことになります。このようなことにも勤務時間外でたくさんの時間がかかりました。また、男子生徒に教えるのに、それはだめだよとか、それはこうしなきゃいけないよとか言うのと、「うるせんだよ、ばばあ」と言われてしまいます。私が感じたことは、男子生徒はあまり叱ってはいけないということでした。例えばきゅうりを切ったら「このきゅうりの切り方、上手だね」、盛り付けをしたら「とてもきれいな盛り付けだよ」って褒めるんです。そうすると、私よりも背の高い男の子がニコニコします。叱るより褒めることが身に付いたというか、大切だなと感じました。

**高瀬:**高瀬と申します。よろしくお願いします。家庭科の教員の大変なところは、常に勉強していかなければならないことだと思います。日々、生活の環境が変わってくるので、子育て、保育の授業をひとつとっても年々変化していきますから、自分が大学で学んだころと教える時とは違ってきます。毎年勉強していかなければ教えることができません。また、私たちの時は情報教育・情報処理の学習が始まり強化されていったので、パソコンを習ったりして、今では考えられない大変なことでした。それから、家庭科はほかの教科とは違って、実習が多い教科です。私は被服を教えたので、授業中に終わらない生徒たちには放課後とか休日とかに指導したりすることが多くて大変でした。集大成としてファッションショーをするので、生徒たちは大物を作ります。家に持って帰れないほど大きい物を製作するので、結局、学校で、勤務時間外で、給料も手当も何も出ないですが、自分の時間を工面してやったということが大変でした。



大貫: こんにちは、大貫です。私は長いこと中学校の家庭科の教員をしていました。中学校の教員は、家庭科の全般を教えることになっていましたから、調理も被服も、家庭電気も、住居も、いろんなことを教えました。一番苦労したのは被服の製作でした。被服製作の授業では、裁断する時はこうしますよ、仮縫いはこうしますよ、袖つけはこうしますよ、という一つひとつの段階の標本を事前につけておいて、段階標本を生徒に見せながら授業を進めたいと思いました。でも、1年生、2年生、3年生の3学年分の段階標本を作るのはすごく時間がかかります。自分が教員になった最初のころは、1年目はここまでの段階標本を作った、2年目はここからここをつくる、3年目はこうやって作っていきこうというふうにして、段階標本を作っていました。もしかしたら大学に泣きついて、こういう段階標本が欲しいって言えばよかったかなって思ったことがありました。和洋では被服もちゃんと勉強しているということは自信にはなりましたが、そうは言っても、私は食物学科でしたから、ぱっぱぱっぱとはできなかったもので、段階標本づくりはちょっと苦労でした。それから千代先生のご精神だとも思いますが、大学でいろんなことを学ばせていただいたので、教員になってから、ものすごく役に立ったと思っています。



#### <生徒たちが関心を持って取り組んだ学習内容>

佐藤: 先生方、どうもありがとうございました。それでは次に、生徒たちがもっとも関心を持った家庭科の学習内容についてお話をお願いいたします。

黒澤: 私は、佐賀県の伝統工芸である「佐賀錦」を織る授業を県立牛津高校の「手芸」の時間にしました。3人の同僚の先生と伝統工芸士の方から佐賀錦の歴史や技法を学ぶために夏休みを返上したいへん苦労しましたが、生徒たちは郷土の伝統工芸に関心をもって、熱心に取り組みました。また、野球の強豪校の佐賀商業高等学校に勤務していた時、家庭科が男女共修になりました。家庭科の被服製作の授業で、男子生徒と女子生徒が一緒になって甲子園で野球部を応援するための卑弥呼のコスチュームを作るという授業は、生徒たちが最も熱心に取り組んだ授業でした。全校生徒分の応援コスチュームをものすごく一生懸命頑張って作って、全校生徒がそれを着て応援して全国優勝したことは、思い出に残っています。

鈴木: はい。生徒たちは作品が出来上がって着装できるととても喜びます。例えば浴衣を作ると、着付けも習います。みんなで着装して写真を撮ったりして、生徒たちはとても喜んで大騒ぎするので、私もとても嬉しかったです。生徒にとって、できあがるということはすごく嬉しいことです。また、男子生徒は保育の授業をすごく喜びました。模型のお人形さんを抱いて、こういうふうにして抱くんだねとか、こういうふうにしておむつを取りかえるんだねとか、こういうふうにして離乳食をあげるんだねとか言って、想像以上に喜んで実習しました。他には、私の時は、技術検定1級の課題はスーツでした。1級に合格した生徒は、そのスーツを着てとても喜んでいました。

**高瀬:**私が勤務していたころは、栃木県は家政科が多かったです。私は家政科の学校に長く勤めさせていただきました。家政科には、技術検定の合格を目指して入学してくる子が多くいました。例えば、被服製作だったら、和服と洋服の技術検定の1級を取得する。それにプラスして食物の1級を取ると、三冠王なんて言いました。生徒たちは検定に合格するととても嬉しいです。普通科の生徒たちは、食べる楽しさということで、調理実習が大好きでした。友達と協力して作って食べるというのがとても良かったようです。生徒たちは「今度何を作るんだい？」って言って、楽しみにしていました。でも、先生は大変です。準備から後片付けまで、他の教科の先生方には考えられないたくさんの時間を使いました。

**大貫:**中学校の生徒たちが一番喜んだのは、調理実習のスイーツ作りです。ものすごく喜んで「うちでも作る」と言って、とにかく一生懸命でした。それから、私が教員になってから情報教育が入ってきて、パソコン室ができて、生徒に1台ずつのパソコンが割り当てられました。私は、家庭科の住居分野の学習で、パソコンを使って自分の住みたい部屋の間取り図を作るという課題をしました。生徒たちはとても喜んで、ここに何を置いて、机はここに置いて、照明はこんなふうにしてなど、将来自分はこういうお部屋に住みたいという見取り図を作り上げました。そして、男女共修になってからは男子生徒もいっしょに授業をしました。保育分野の授業で、生まれてきた時の3キロの赤ちゃんの重さに驚いて、男子生徒たちが「こんなのが腹に入ってるのか」と言うので、「そうだよ。女性はこんなに大きな赤ちゃんをお腹の中に入れてるのよ。それでも頑張るお母さんって素晴らしいよね」と言ったら、「本当だ、本当だ」って男の子たちが喜んで、興味を持って授業に取り組んだのを覚えています。

**佐藤:**先生方、大変貴重なお話をありがとうございました。このような現場での生々しいお話を伺っていると胸が熱くなります。ありがとうございました。

和洋の学生さんたちは卒業して特別支援学校に就職する人もいます。インタビューの中で、鈴木先生は最初に赴任された学校が特別支援学校だったので、すぐに東京学芸大学に入られて、特別支援の教員免許状を取得されたとうかがいました。特別支援学校で家庭科教員として教えられていかがでしたか。

### <特別支援学校と家庭科、和洋で学んだことと学校運営>

**鈴木:**栃木県に初めて特別支援学校ができて、小学校の4年生、5年生、6年生のクラスだけがありました。私は小学校の免許は持っていなかったので、家庭科の教員として配属されました。そのころの支援学校の子供たちは、てんかんの子、交通事故で片手がなくなった子、片足がなくなった子などの肢体不自由な子が多かったんです。ですから、家庭科の授業というよりは、基本的な生活習慣、例えばご飯を食べさせたり、食べるときはお箸やスプーンを右手で持ってとか、お皿を左手で持ってとか、こぼさないようにとか、トイレ行った時の手の洗い方とか、そのような本当に基本的なことを教えました。それからおむつをしてる子どももいました。実習助手がいまませんでしたから、おむつの取り替えを教員がやりました。私は、特別支援学校教員の資格を取らせていただいたことに、すごく感謝しています。皆さんも、普通高校だけでなく、特別支援などにもぜひチャレンジしてみたいと思います。

**佐藤:** 鈴木先生、ありがとうございました。大貫先生は 26 年間、中学校でお仕事されたあと、小学校に異動されて教務主任から校長までされました。インタビューの時に、小学校の校長講話では、和洋の生物学や栄養士課程で学ばれたことを深掘りしたり、発展させて、子どもたちにとって魅力的なお話をされたり、子ども達とコミュニケーションしたとうかがいました。学校運営する上で家庭科教員でよかったというようなことはありましたか。

**大貫:** 私は、管理職を 13 年やらせていただきました。その中で、自分が家庭科教員でよかったというか、和洋で学んでよかったと思っただけのことがあります。それは、学校ではいろいろなことが起こります。毎日、本当に予期せぬことが起こるんですけど、臨機応変に対応できたということです。私は食物でしたから、実験や実習がとても多かったです。調理実習や実験以外にも、栄養士実習や校外研修で、自衛隊や病院などいろんなところへ行かせていただきました。そうした経験も大変役に立ちました。それから大学の生物学の先生の授業が忘れられませんでした。先生が毎回の授業に必ず何か持ってきてくださって、受講生がいっぱいいましたけれど、「これ、和洋の入り口にあった」と言ってみんなに見せて、「これ何だかわかるかい」って言って、「これはこの時期の、この気候のここにしかない花なんだよ。君たちの出身はどこだい」と仰って、それぞれ「君は」とか言って学生を指して、「そっちには生えていないよ。この和洋のこの辺にうんとある花だよ。これ何々って言うんだ」と言って、伝来はどう、由来はどうという説明を毎回の授業の前にはしてくださいました。また、「これは、里見公園で採ってきた葉っぱだよ。これはね、噛むと何何の味がするから、はい、みんな噛んでみて」とかと言って、私たちは本当に噛んでいいのかなと思いつつ噛んでみたりしました。その授業が今も鮮明に自分の記憶に残っています。小学校には月 1 回ぐらい校長講話っていうのがあります。校長先生のお話はつまらない、校長先生は何しゃべっているかわからないというのが一般的ですよ。小学校 1 年生もいますから、校長先生は何を言っているのかわからないなんていうより、生物学の先生のように、自分で何かを作って持って行って、それを子どもたちに見せながら話をしようと思いました。例えば、帽子を作って校長講話に持って行って、「校長先生のお話をよく聞くためには？」と子どもたちに問いかけて、帽子に犬の耳なんかをポンと付けて、「大きな耳で聞く」とか言ったり、目も付けて「珍しいものは大きな目を見開いて見よう」とか話しました。他にもいろいろ作って、こうやると動くんだよ、太陽の光線で動くんだよ、とか言ってやっていました。そんなことをやっていたら、子どもたちが校長講話を生き生きと聞いてくれるようになりました。これは、私がこの和洋で学んで、ものすごく感動した生物学の先生の授業が私の身になっていて、それを教員になってから活かせたんだと感謝しています。

### < 大学時代に家庭科の学習内容以外で学んでおくこと >

**佐藤:** 次に、学生さん達から 2 番目に多かった質問が、これから教員になる学生が、家庭科の学習内容の勉強以外で学んでおいた方がよいことは何ですか、という質問でした。先生方いかがでしょうか。今度は、手を挙げていただいて、順番にお願いいたします。

鈴木:家庭科を教えるにあたって、もちろん講義も重要ですが、実習がとても大切になってきます。生徒たちも実習することをとても喜びます。男子校の男の子も、特別支援の肢体不自由の子どもも、普通高校の家政科の子どもも実習が大好きでした。ですから、夏休み期間中などを使って、いろいろな実習を経験することをお勧めします。例えば、私はレザークラフトとか草木染めをお隣に座っている高瀬さんと一緒に十何年間か習いました。それから、日光彫り、茶道、華道、書道、ニットソーイングとか着物リメイクも習いました。書道は、卒業証書を書くのがどうしても間に合わないというのでお手伝いしました。学校のお役に立ったのではないかと思います。着物をほどいて洋服にする着物リメイクは、20年ぐらい続いていて、今も凝っています。学生さんたちも夏休みなどのお休みの期間に、市町村など、あらゆる場所に講習できるものがありますから、そういうところに参加して、いろいろなものを身につけてほしいと思います。



大貫:大学の中だけでなく、いろいろなところで、いろいろな体験をすることによって、危機管理意識とか、対応力とかが身につくと思います。私は大学生の時に、担任の先生だった寺本よしこ先生に誘っていただいて、NHKの高校家庭科講座のお手伝いとして出演させていただいていました。そこで「1分、2分が大事です。余計なことをしゃべらず、相手に分かる言葉で、短時間で明瞭にお話してください。内容をきちんと整理してお話してください」と指導されました。この経験は教員になってから、とても役に立ちました。それから、学校では保護者の対応やトラブルなどいろいろなことがあります。皆さんは、アルバイトとかもなさるでしょうから、そういうところで人とのコミュニケーションのとり方とかも学んでおいたら役に立つと、管理職になってから強く思うようになりました。

佐藤:大貫先生、ありがとうございました。学生さんたちから少数でしたが、保護者の方への対応をどうするかという質問もありました。今、大貫先生がお答えくださいました。

### < 伝統文化の継承、福祉教育、国際交流を取り入れた家庭科 >

佐藤:黒澤先生は、先ほど佐賀の伝統工芸である佐賀錦を手芸の授業や家庭クラブの活動に取り入れたというお話をしてくださいました。黒澤先生のお話をお聞きして、家庭科は、地域性というのか、その学校がある地域の特長や伝統文化を継承していくことのできる教科ではないかと感じましたが、いかがでしょうか。

黒瀬:はい、佐賀藩は藩主が鍋島さんで、佐賀藩の鍋島の奥方様たちや女性達が佐賀錦を創ったと言われています。佐賀錦を織るのは、とても根気のいる手仕事で、細かく精密な技術が必要なので、一日にわずかし織ることができません。家庭科の授業の中で高校生が郷土の伝統工芸を知ったり、郷土愛を感じたりすることは素晴らしいことだったと思います。佐賀錦を織る授業は、牛津高校で現在も続いていると聞いています。

**佐藤:**高瀬先生は、家庭クラブ活動で福祉教育やモンゴルとの国際交流に力を入れられたとうかがいました。福祉教育や国際交流をされたご経験についてお話ししていただけたらと思います。

**高瀬:**皆さんは、家庭クラブ活動をご存知だと思います。家庭クラブの4つの精神が「創造・勤労・愛情・奉仕」です。家庭科は、この4つの精神に尽きると思います。私はこのうちの「奉仕」の精神を重視し、授業時間外で生徒たちと地域の福祉施設訪問、ボランティア活動、車椅子を寄付する活動をしました。また、モンゴルとの交流もしました。勤務していた高校と関係があったモンゴルが大寒波で困っているというので、古着を集めて送る活動を生徒たちと十年ぐらい続けてやりました。そうしたら、生徒たちが、自分たちが送った古着が本当にモンゴルで役に立っているかどうかを確かめたい、モンゴルに行きたいと言うんです。それで、いろいろと許可を取って、夏休みに代表の生徒たちとモンゴルに行って、交流していたモンゴルの学校を実際に訪ねて、そこの高校の生徒たちと交流しました。3年間毎年行きました。代表として参加した生徒は帰国後に報告会を開き、成果を報告しました。すごく活発に家庭科クラブの活動をやっていました。

**佐藤:**ありがとうございました。モンゴルに3回も生徒さんを引率されるというのは、ものすごい情熱がないとできないことだと思います。

#### <和洋で学んだ学習内容や教育がどのように役立ったか>

**佐藤:**残り時間がわずかになってきました。最後に和洋で学んだ学習内容や教育がどのように役立ったかということ、一言ずつお話ししたいと思います。大貫先生の方からいかがでしょうか。

**大貫:**はい。先ほどもお話いたしましたけれど、和洋で実験や実習がとても多い食物学科でしたので、校外の実習、病院実習や自衛隊実習とか、それから、見学もいろいろな所に連れて行っていただきました。国の米穀倉庫にも行って、とても大きな倉庫を見せていただいたり、-40度の冷凍庫にも入れていただいたりとかしました。このような数々の経験が、自信に繋がりましたし、生徒たちに教えるときに、こんなことがあるんだよ、こういうところもあって、こんなことも学べるんだよって伝えることができました。それから、被服の実習も大学でたくさんさせていただきました。洋裁、和裁、編み物、刺繍とか、和洋で学んだことすべてが、教職についてからものすごく役に立ったと思います。皆さんも頑張って勉強してください。

**高瀬:**私も実習で非常にきめ細かい指導をしていただいたおかげで、教員になってからも困らないで教えられたかなと思います。それから、私は4年間寮生活をしました。寮生活の中で、寝食を共にした仲間たちといろいろな交流し、いろいろな人との交わりを経験しました。大学時代に寮生活で学んだことが、教員になってから、生徒はもちろん、保護者やボランティア活動を通して知り合った地域の人々とおつきあいするときにも大いに役立ったと思います。

**佐藤:** 高瀬先生、ありがとうございました。高瀬先生から、寮のお話が今日始めてでました。和洋には寮があって、寮には何百人という学生さんが全国から集まっていたそうです。寮生の中には、夜も助手の先生から被服製作の指導を受けて提出物を作った人もいたとうかがいました。和洋に寮があったから、地方から大学に通って学び、卒業後は郷里などにもどって家庭科の教員として活躍することができました。卒業生の皆様たちの時代は、寮の果たした役割がとても大きかったと思います。私たちのインタビューでも、寮が同じだったので学年や出身地域を超えて繋がりを現在でも持っている、と話される卒業生が多かったです。鈴木先生、いかがでしょうか。

**鈴木:** はい。私もここに国府台寮というのがありまして、そこで4年間、すごさせていただきました。和洋で勉強したことはすべてが役に立っていると思います。私は退職して20年経ちますが、今このような高齢者になってからも和洋で学んだことがすべての基礎になって、いろいろな趣味につながっていると思います。ですから、皆さんも大学でたくさんのことを学んで、それを教員になった時だけではなく、もっと将来まで続けていただきたいと思います。私は、今とても楽しんでます。

**佐藤:** 和洋で学んだことは、教員時代だけじゃなくて、退職してからも生涯にわたって人生を豊かにしてくれているということですね。素晴らしいお話を伺いました。鈴木先生、ありがとうございました。黒澤先生、最後にいかがでしょうか。

**黒澤:** 佐賀県の家庭科教員には、和洋の先輩、後輩が多かったです。そのため、和洋の先輩、後輩の先生方に私はいろいろと助けていただきました。分からないことがあると、本当にきょうだいのように、先輩たちがここはこうよ、と教えてくれました。和洋の同窓生の強いつながりに感謝しましたし、和洋の卒業生で本当によかったと思いました。

**佐藤:** 黒澤先生、ありがとうございました。私は、70代から90代の卒業生の方々にインタビューして、同窓生の繋がりがとても強いことを感じました。それぞれの地域で、和洋の卒業生が年齢をこえて繋がっていらっやあって、助け合っています。学生の皆さんたちも教員になったら、それぞれの地域にいらっやる和洋出身の先輩たちを大いに頼ったらよいのではないかと思います。この対話セミナーが終わった後も、先生方はしばらくこの会場にいらっやいますので、学生さんたちが個人的にこの先生にこんなことをお尋ねしたいということがありましたら、ぜひお声をかけていただきたいと思います。それでは時間になりましたので、4人の先生方、どうもありがとうございました。どうぞ皆様、拍手をお願いいたします。

## お話をうけて

**佐藤:** それでは次に、及川さんと会場にお見えになっている先生方から、4人の卒業生の皆様のお話に対するご感想やご意見などをお話いただきたいと思います。最初に及川さん、いかがでしょうか。



**及川:** はい、貴重なお話をありがとうございました。実は、私も家庭科の教員免許を持っています。実際に使ってはいないですけども、卒業生の先生方のお話を非常に興味深く聞かせていただきました。家庭科は、座学と違って、自分で手を動かしてやるものなので、完成した時の嬉しさだったりとか、記憶がすごく強く残るのではないかなと思います。先ほど先生方が学生の頃は苦労したけれど、教員の時だけでなく、今の趣味にもつながっていると話されていました。まさに若い時に苦労は買ってでもした方がいいということかと思います。学生さんは初任の時とかは大変だと思いますけれども、今の先生方のお話を思い出しながら頑張ってほしいと思いました。

**佐藤:** ありがとうございました。久保先生、お願いします。

**久保:** 皆さん、こんにちは、久保です。今日は先輩方の楽しいお話や素晴らしいお話を私も皆さんと一緒に聞きできて、大変いい機会になりました。そして、和洋の歴史の重みを改めて感じました。このような先輩方がそれぞれの地域でがんばって、和洋の歴史を作ってくれている。その歴史の上に、私たち、皆さん達の学びがあり、私たちも和洋の歴史と一緒に作っていきんだなって感じました。私は昨年まで学生さんの就職などのお世話もしていましたけれど、先輩たちが声をかけてくれて、皆さん達が就職できたりしているんですよ。そういう繋がりはいくらも本当に大事にしていかなければいけないと感じました。

それから、及川さんに堀越千代先生のこの本を書いていただき、私も及川さんに感謝したいと思います。和洋の創立者がどんなお気持ちでこの学校を創立したのか、そして、最後のあとがきに及川さんが書かれていますけれど、千代先生が論説講話に「何事にも進退窮まった場合は、一歩だけの距離を置いて、冷静に常識を働かせて見たならば種々の手段が講ぜられ、思い出されて、決断もつきやすく、解決も出来ましょう」と書き残されています。このおおらかさというか、しなやかさというか、創立者のそういった精神が、現在の和洋の空気の中にもあるのかと思いました。及川さんの『自営の心』のご本を、私はそんな気持ちで読ませて頂きました。ありがとうございました。



**佐藤:** 久保先生、ありがとうございました。今日、名誉教授の中島明子先生がいらしてくださっています。突然で申し訳ありませんが、中島先生ひとことご感想をいただけたらと思います。

**中島:** 和洋女子大学の創立の時の話、私たちは意外と知らないんですよ。125年以上も経っているし、和洋は本当に素晴らしい歴史を持っているはずなのに、これまでそれが十分伝わっていないところがありました。ですから、及川さんが創立からのことをこの1冊の本にしてくださいました。ありがとうございます。

それからお話していただいた4人の先輩方が、とても素晴らしいですね。学生の皆さんは、先輩たちが和洋を卒業して、色々な地域でそれぞれ活躍されたお話を聞くことができ本当に良かったと思います。皆さんたちはこのように歴史のある大学に入学され、学んでいるんです。どうもありがとうございました。



**佐藤:** 中島先生、ありがとうございました。柳澤先生も駆けつけてくださっています。突然で申し訳ありませんが、ご感想などをお話ください。



**柳澤:** 健康栄養学科で調理を担当しております柳澤です。今日、本当にこの素晴らしい会にご案内いただき、ありがとうございました。私も家庭科教員の資格を持っていますが、家庭科は生活に密着していて、自分の手とか目とかの五感を全部使って学んでいくことが本当に多いということを、今日の4人の先生方のお話をお聞きして実感しました。学生の皆さんもぜひ大学でいろいろなことに挑戦して、教員になったら生徒が楽しいな、またやってみたいなって思えるような家庭科の授業をしていただきたいと思いました。本当にありがとうございました。

**佐藤:** 柳澤先生、ありがとうございました。次に柴田先生、いかがでしょうか。

**柴田:** 私は今、学生たちに家庭科教育を教えております。私自身、家庭科が好きで家庭科教員を目指して大学に入り、そのまま大学教員になりました。4人の先生方のお話の中で、家庭科は教員を定年してからも趣味として楽しんでいけるということをうかがって、私も退職後に楽しもうと思いました。先生方のお話の中で教員をしていて子育て期が大変だったということでしたが、私はまだそのステージで、本当に大変なことが沢山あるのですが、このステージがすぎれば、またものづくりを楽しめる時がくるのだなと嬉しくなりました。今は、家庭科教員になって行く学生達を見ているのはすごく楽しいです。これからの私の課題は、教育現場と繋がって、興味深い授業を作っていくことだと思いました。ありがとうございました。



**佐藤:** ありがとうございました。それでは最後に、工藤先生、お願いいたします。



**工藤:** 家庭科教育研究所の工藤です。今日は本当にありがとうございました。和洋学園を卒業された大先輩たちを訪ねてお話を伺うという企画は、家庭科教育研究所が始まって以来続けてきた私たちの活動でした。今日は、このような素晴らしい大先輩 4 人の方のお話をお聞きできて本当に良かったと感動しています。また、及川さんは大学の後輩で、深いつながりのある方でした。偶然、和洋でまた巡り合うことができ嬉しかったです。

実は、私はこのプロジェクトに携わるまで和洋女子大のことをあまり存じ上げなかったのですが、大先輩たちを訪ね歩いてお話を伺う中で、和洋はこんなに素晴らしい歴史とこれだけたくさんの素晴らしい人たちを生み出してきた大学であること、そして、日本の女性の学問への情熱とか蓄積とかに心打たれました。また、今日の 4 人の先生方からのお話で、「身に付ける」ということはどういうことなのかということをお教壇いただきました。今、私たちは AI の時代で、たくさんの情報に接することで分かったような気になってしまう、また実際に自分で体験しなくてもできたつもりになれる時代にいます。学生のみなさんがこれから教える子どもたちは、きっと自分で経験しなくても分かったつもり、何でもできるような気持ちになっている子どもたちだと思います。けれど、そのような時代だからこそ「身につける」ということが、どれだけ素敵なことかを、今日の先生方のお話から学ばせていただきました。これからの新しい時代のキーワードになるものを、先生方の生き方の中で教えていただいたと思います。今日は本当にありがとうございました。

**佐藤:** 及川さん、先生方、どうもありがとうございました。この 2 時間の対話セミナーにはいっぱいの内容が詰まっていたにもかかわらず、このように時間ピッタリで進行することができて奇跡的だと思います。セミナーの進行にご協力いただき、皆様に感謝申し上げます。先ほどもお話しましたように、トークセッションでは、学生さんたちに事前に質問を出していただいて、先輩たちにお答えいただきました。学生さんたち、家庭科教員になってからも、今日の及川さんや先輩たちのお話を思い出していただきたいと思います。

最後に、閉会のことばを家政学部長の熊谷優子先生にお願いいたします。

## 閉会のことば

**熊谷:** 家政学部長の熊谷と申します。今日は、及川さん、それから黒澤先生、鈴木先生、高瀬先生、大貫先生、本当にありがとうございました。今日、及川さんから学生さんに向けて、自分のキャリアプランを立てて、自分が楽しいと思える生活をしてほしい、そのためには人とのつながり、社会とのつながりを大切にしてほしいというメッセージが送られました。この及川さんの言葉は、学生さんたちの心に響いたのではないかと思います。また、今日いらしていただいた4人の卒業生の先生方からのお話では、家庭科が生活に密接に繋がっていること、身に付けていくと自分の生活を豊かにできるものであることを、私自身も実感できました。そして、家庭科は地域で残していきたい文化を継承していくようなこともできる教科であることも分かりました。学生の皆さんも、中学や高校で家庭科の先生になったら、その地域の文化を継承していくということも、家庭科教員として実践していただきたいと感じました。今日はこのような素晴らしいセミナーを企画していただき、ありがとうございました。学生さんにとっても、とても刺激になり、やる気が起きるようなセミナーであったと思います。本当にありがとうございました。



**佐藤:** 熊谷先生、どうもありがとうございました。この2時間をみなさんと共有できたことは、とても貴重で意義深いことだったと思います。それではこれで「和洋卒・元家庭科教員の先輩と学生との対話セミナー」を終了させていただきます。皆さま、ありがとうございました。

## 「対話セミナー」を受講した学生の感想

### <和洋の歴史の重みと堀越千代先生の偉大さ>

- ◆和洋女子大学の祖である堀越千代先生についてもっと知りたいと感じ、及川亜希子先生が書かれた『自営の心』を読んでみたいと思った。
- ◆自分たちが学んでいる大学を築いてこられた堀越千代先生の歴史について知ることができ、大学の成り立ちや受け継がれてきた思いを実感した。
- ◆和洋女子大学には非常に古い歴史があり、さまざまな人の思いがその背景にあることを知った。「忍耐」「自営の心」のどちらも詳しい内容に興味を湧いた。
- ◆今回のセミナーを通して和洋女子大学の歴史の重みを感じる事が出来た。
- ◆堀越先生が作られた歴史を先輩方が受け継いでいること、堀越先生の思想を大切にされているのがわかった。私は高校のころから和洋に通っていたため、創設の歴史には触れていたが、先輩方のお話をきいてより深く学ぶことができた。
- ◆今回の対話セミナーに参加して、堀越千代先生の偉大さを改めて実感することが出来た。また、先輩方の話を聞いて教員の魅力や特徴について知ることができ尊敬した。
- ◆和洋女子大学の長い歴史と、その歴史を支えてきた人々の思いを強く感じた。これまで当たり前のように学んできた環境は、先輩方が努力を積み重ねてきた結果として成り立っているのだと分かった。特に堀越千代先生は、時代的にも女性が学ぶことや働くことが簡単ではなかった中で、女子教育の必要性を信じ、和洋女子大学の基礎を築いた。その行動力と努力は本当にすごいと感じた。今回のセミナーを通して、大学の歴史を知ることが、これから自分が学んでいく意味を考えることにもつながると感じた。
- ◆堀越千代先生の生涯を通して、困難な時代の中でも学びの場を切り拓き、女性の可能性を広げてきた先人の力強さは強く印象に残った。また、教育は知識を教えるだけでなく、生き方や価値観を伝える営みであることを改めて学んだ。
- ◆堀越千代さんのことは、大学の創設者で家庭科教育に大きな影響を与えた方なんだと今回の講演で改めて感じた。また、和洋女子大学の学生として、この4年間を大切に、自分の将来に活かしたいと思った。
- ◆和洋女子大学は歴史があると共に、たくさんの方々が紡いだ思いなどがあることを学んだ。私も大学での学びを、将来の夢だけでなく、将来の生活に繋げられるようにしたいと思った。
- ◆本日は、和洋女子大学卒業生であり元家庭科教員でもある先輩と学生との対話セミナーに参加し、多くの学びを得ることができた。特に印象に残ったのは、和洋女子大学が勤勉な堀越千代先生によって築かれ、長い歴史と確かな教育理念を受け継いできた学校であるという点である。現在その大学に通っている自分が、改めて歴史ある学びの場に身を置いていることを実感し、誇らしい気持ちになった。
- ◆和洋女子大学で様々な事が学べるのは設立者である堀越千代さんが多様なことを学んでいたからなのだと知り、堀越千代さんに尊敬の念を抱いた。また、先輩たちの実体験を直に聞くことができ、教員としての在り方を考えさせられた。

## <先輩たちのお話から学んだこと>

◆先輩たちのお話から、家庭科は時代ごとの社会状況や教育的ニーズの変化に応じて、扱う内容や教え方が大きく変化してきた教科であるという点が印象に残った。そして、金融教育や洗濯など、当たり前のように学んできた内容も、社会背景と密接に結びついていることは盲点であった。また、地域特有の題材を授業に取り入れることが重要なポイントであると感じた。黒澤先生が話してくださった佐賀県の学校で佐賀錦を授業として展開した事例から、私の地元である千葉県では何を題材にできるかを考えるきっかけになった。

◆現在、教職と司書教諭を目指して勉強している。常に課題に追われて日々大変だなと感じることが多いが、今回のセミナーをきいて、学び続けることや人との関わり、何事にもチャレンジする気持ちなどを大切にしたいと思った。そして、教員になった時、黒澤先生のように地域の特長を取り入れた実習(千葉県に住んでいるので梨農園などを題材としたものなど)に挑戦したり、教員と生徒間での関わりだけでなく、保護者や地域、そして、今よりも教員を目指す仲間たちとの関わりを大切にしていきたいと思った。大変貴重なお時間をいただき、本当にありがとうございました。

◆黒澤先生のお話では、教員として大変だったこと、和洋での年齢を超えたつながりや、周囲の人が優しく助け合っていた経験が、教育現場での人間関係づくりに生きていることが伝わってきた。

◆卒業生の4人の先生方のお話はとても面白かった。特に鈴木先生から男子に家庭科を教える際は、「そうじゃない」ではなく、「その切り方すごく上手だね」「綺麗に盛り付けたね」というような肯定的な声かけをしたという話を聞き、このような前向きな言葉がけが生徒の「もっと挑戦したい」という挑戦意欲を育むことを学んだ。私も教員になった際には、ポジティブで肯定的な挑戦意欲を育むような声かけをたくさんしていきたいと感じた。また、保育の授業では赤ちゃんの人形を抱っこすることに生徒は興味を持ったというお話をうかがって、実践的な授業により生徒の主体性を育むことができるのだと思った。先輩たちのお話をお聞きして、教員として働く際には、体験を多く取り入れた授業をしたいと思った。

◆元家庭科教員の卒業生のお話を聞いて、教員とは大変な事も沢山ある一方で生徒の成長を間近に感じられることが魅力だと感じた。特に、鈴木先生の自分より背の高い男子生徒が「先生できた」とニコニコしながら作った物を見せてくれたというお話が印象に残った。何かを達成したときに生徒と一緒に喜べる教員という仕事は素敵だなと思った。

◆先輩方のお話の中で特に興味深かったのは、鈴木先生が話してくださった家庭科が男女共修となった当初、工業高校で初めて男子生徒に家庭科を教えた経験についてである。男子生徒が「こうやってやるの?」「盛り付けはこれで合っている?」と積極的に質問しながら授業に参加していたというエピソードをお聞きして、家庭科が性別に関係なく生活に必要な学びであること、そして教える側の工夫や姿勢が学びへの意欲につながることを強く感じた。

◆鈴木先生からは、家庭科の基礎が教員として役立っただけでなく、今でも趣味として続いており、将来まで楽しめるものになっているというお話があり、学生時代は大変でも、その学びが長く自分を支えてくれるのだと感じた。

◆大貫先生のお話からは、生徒が特に興味を示した学習内容や小学校での子どもへの対応について、高瀬先生からはモンゴルとの交流のお話など、現場ならではの具体的な経験をお聞きすることができ、とても深い学びになった。

◆大学時代に実験や実習が多く、さまざまな体験を積めたことが自分の自信につながり、その経験を子どもたちに伝えることができたという大貫先生のお話は心に残った。

◆高瀬先生の和洋での被服の実習は、教職に就いてからも非常に役立ち、実際の授業でもあまり困ることがなかったというお話から、基礎をしっかり身につけることの大切さを感じた。また、学生時代に寮生活を通して学年を超えた交流や人とのつながりを築いた経験が、生徒との関係や福祉の実践的授業やボランティア活動、モンゴルとの国際交流にも生かされたというお話も心に残った。

◆教育現場や管理職を長く経験してこられた大貫先生から、普段は聞くことのできない貴重なお話を聞くことができた。特に、家庭科は知識だけでなく、生徒一人ひとりの生活や思いに寄り添うことが大切だというお話が印象に残った。実際の経験に基づいたアドバイスは、将来教育現場に立つ際に役立つと感じた。

◆卒業生で家庭科教員だった先生方のお話を聞き、当時の教育現場の様子や先生としての歩みを知ることができた。卒業生でもある先輩方の経験から多くの学びを得られた貴重な時間だった。

◆講演者や卒業生の方々のお話から、家庭科教育や女子教育が時代や社会と深く結びつきながら発展してきたことを強く感じた。先輩たちが現場での実践を大切に、生徒一人一人の生活や思いに寄り添いながら教育を築いてきた姿勢には、教育者としての使命感と情熱を実感した。

◆昔と比べて現在の教育は大きく変化しており、特に昔の教育現場は今以上に厳しい指導が当たり前だったと感じる。そのような時代を経験しながら、長年にわたって教員として働き続けてこられたことは本当にすごいことだと思った。厳しい環境の中でも教育に向き合い続け、生徒と関わってきた姿勢には尊敬の気持ちを抱いた。

### <家庭科や家庭科教員の魅力>

◆家庭科は時代とともに変わってきた部分もあるが、生活に密着した大切な教育として、ずっと受け継がれているところが魅力だと思った。こうした歴史を知ることができて、自分がこれから目指していく教育の在り方について、改めて深く考えるきっかけになった。

◆先輩方が教員として活躍されていた時代と現在とでは、指導法や授業内容に大きな違いがあるのではないかと考えていた。しかし、実際にお話を伺うと、時代が変わっても生徒から評判の良い授業には共通点があることを知った。調理実習やクラフト系など、生徒が実際に手を動かし、完成の喜びを味わえる授業は現在の家庭科の授業においても変わらない魅力であり、体験的な学びが生徒の意欲や満足感につながっていることを改めて実感した。

◆今回のセミナーを受講して、家庭科教員の歴史が受け継がれてきたことや、家庭科教員として現場に立つ中で大変さや工夫、やりがいについても知ることができ、深い学びになった。

◆今回のセミナーを通して、家庭科教育の意義や可能性、そして和洋女子大学で学ぶことの価値を改めて考える貴重な機会となった。今後の学びや将来の進路を考える上でも、大きな刺激を受けた時間であった。

◆教員という職業は大変なことも多いが、その分生徒の成長を見られたり自分の考えを教育やクラブ活動に活かしたりなど、忘れられないような思い出や経験をたくさんすることができるのだと改めて感じた。

◆調理実習や赤ちゃんの人形などの実際に体験して学ぶ授業に生徒は興味を持ちやすいとのことだったので、私が授業をする際は積極的に取り入れていきたい。一方で、大変だったこととして、常に勉強し続ける必要があることや、被服製作の難しさ、実習の時間が長すぎってしまうことなどが挙げられていた。

◆生徒が最も関心を持った内容について、多くの先輩方が被服や調理の実習だと仰っていた。私も大学の授業の中で自分が作ったパジャマが完成したときやみんなで作ったご飯が完成したときはとてもうれしく感じたので、共感した。

◆私は家政科の高校出身で浴衣制作を経験したが、着装や写真撮影まで行えば、学習内容を実生活により活かせる授業になるのではないかとセミナーを通して感じた。

◆卒業生の先生方のお話から家庭科は AI では身につけることのできない学問であり、自分の人生の一部にもなっているということを改めて感じる事ができた。家庭科の先生を目の前にするとやる気がとても出た気がした。これからも頑張りたい。

### <人生を豊かにした和洋女子大学での学びと経験>

◆昔の和洋での学生生活がどんなものだったのかを聞いてとても興味深かった。また、寮で4年間過ごしたことで仲間との年齢をこえた親密な交流があったとうかがって、国府台に学生寮があったことに驚いた。

◆今回のセミナーを通して、和洋女子大学での学びが教員としての実践や、その後の人生にも大きくつながっていることを知る事ができた。

◆先輩の皆さんが、大学で学んだことは、教員として授業に活かすだけでなく、退職した後も自分の趣味となって人生が豊かになっているというお話がとても素敵だと思った。私は家庭科という分野は、学んで得た知識が生活の中で一番自分のためになる教科だと思っているので、先輩方が実際に趣味として楽しんでいることを知ることができてよかった。

◆大学で学んだことが基礎となり、やがて趣味へと発展し、生涯にわたって役立っているという話が印象的だった。

◆及川さんや卒業生の皆さんが共通していろいろなことを大学内外で経験してほしい、人とのつながりが大切、と話されていた。私は大学生になってから授業以外のことをあまりしておらず、普段関わる友人も多くないため、もう少しいろいろなことに目を向けて何か行動を起こせたらと思った。

◆家庭科教員になるための学内での学習だけでなく、講習への参加やアルバイトなど、学外に出て人と関わる経験を積むことが、コミュニケーション力や対応力を高めることにつながるという卒業生の皆さんからのアドバイスは、これからの学生生活に活かしていきたいと感じた。

◆素晴らしい先輩方のお話を聞き、和洋女子大学に入学できて本当に良かったと感じた。先輩方のこれまでの歩みや考え方を少しでも取り入れながら、これからの学生生活、そして将来へとつなげていきたい。

◆本日のセミナーでは女性の先生方がたくさん集まっていて、かっこいいと思い、私も自由に働く女性のひとりになりたいと実感した。



事前の打ち合わせ



開会のことば 佐藤宏子



趣旨説明 佐藤宏子



及川亜希子氏の講演



講演者の及川氏、聞き手の佐藤



講演 及川亜希子氏



トークセッション



トークセッション 黒澤知子先生



トークセッション 鈴木満里子先生



トークセッション 高瀬豊子先生



トークセッション 大貫憲子先生



お話をうけて 及川亜希子氏



司会進行の佐藤



閉会のことば 熊谷優子先生



講演者・講師と関係者



藤田トラ先生作品と講師の卒業生の皆様



和洋女子大学から富士山とスカイツリーを望む

和洋女子大学 家庭科教育研究所  
「和洋卒・元家庭科教員の先輩と学生の対話セミナー」報告

---

2026年2月

---

編集・発行 和洋女子大学 総合研究機構  
家庭科教育研究所

Home Economic Education Research Lab

〒272-0827 千葉県市川市国府台 2-3-1

E-mail : [kateika@wayo.ac.jp](mailto:kateika@wayo.ac.jp)

<https://kateika.main.jp/>

